大經師昔暦

上　巻

作者　近松門左衛門

歌　唐猫が男猫呼ぶとて薄化粧。するはしほらしや。猫さへも。つまゆゑ忍ぶに我が身は。何と唐打の。エイソリヤ綱より。とけぬ契りぞや。じやれてそばへて手鞠とれ〳〵ま一つ二つ。三つ四つ五つ六つ七つる八つる九ほんほとをんゑ。ゑいころ〳〵〳〵。フシころり炬燵にしなだれて。懐くも己が。戯ならん。地それは昔の女三の宮是はおさんの雷世女。夫の名さへ春を以ては色香に鳴る。梅の暦の根本大經師以春として。袴入らずの長羽織家居も京のどうぶくら。諸役御免の門作り フシ名高き四條烏丸。地すでに貞享元年甲子の十一月朔日。來る丑の初暦けふより廣むる古例に任せ。主以春は未明より。禁裡院中親王家五摂家清華の御所方へ。新暦を獻上し方々の目出度酒。嘉例の如く去年の如く。十徳着ながらフシ炬燵に。とんと高いびき。算用場には手代ども進上暦の枚包。江戸大阪の下し暦地賣子供の取捌。一門振舞祝儀の使。かまどの霞鮑の雪。春めき渡る擂鉢の音。今日の霜月朔日をフシ元日とこそ祝ひけれ。地おも手代助右衛門。此の家の束ね綿の小紋の羽織。主も心を奥縞の袴本渡の昆布の皮。こはばつたる顔付にて。詞ヤ旦那はまだお休みか。夜の中から方々の勤くたびれはお道理。申しおさん樣。茂兵衛めが戻つたら代らうと存ずれど。何處にのらをかはくやら。二條向お屋敷方の進上暦が遅なはる。一息に廻つて來ませう。嘉例の通御一門衆お出なされう。御臺所か姫君の樣に。猫ちやうらかしてござつても濟まぬこと。これ玉。同じ樣にそれ何ちや。奥の臺子も仕かきや。庭の小座敷も掃除しや。炬燵に火を入りや。違ひ棚のほこり掃うて。地雙六盤將棋盤。碁石の數もよんで見て。手水鉢に水入させ手拭もかけかや。煙草盆に切炭いけて膳立をして椀ふいて。お給仕に差合はう夕飯早うくてしまやと。一口に千色程。まだ面倒な其の猫めぎやあ〳〵とほえるが能で。鼠一疋取りはせず。詞雄猫見てはびろ〳〵と屋根も垣もたまらぬ。重て屋根でさかつたら 地四つ足括つて西の洞院へ流してくりよと。なんの掛も構ひなき猫に迄滋口の。茶の間中の間隅々見廻し。それ久三挾箱。詞暦配る家によつてはお引が出る。只取ると思ふな給分に引きつぐ。地斷つて置いたぞと フシ打ちつれ表に出でにけり。地おさん玉が顔見合せ。詞なんと今のを聞きやつたか。おんなじ物のいひ樣で。茂兵衛の樣に物柔かにいうても事は調ふ。

あの人も氣に如才はなささうなが。地體の顔が憎體に慳貪に見える故。詞も愛想がなささうな。なんと助右衛門男に欲しいか肝煎つてやらうか。エヽおさん樣いやらしい事おしやんすな。あんな男持たうより牛に突かれたがまし。同じ手代衆の内でも茂兵衛殿の樣な。假初に物いふも。愛想らしうていつ腹立顔も見せず。ほんにあの樣な男持つ女子は果報でござんす。ほんにいやればさうぢや。地猫にも人にも相緣奇緣隣の紅粉屋の赤猫は。見かけから優しう此の三毛をよび出すも。詞聲を細めて恥かしさうに見えて。こいつが男にしてやりたい。又向ひの練物屋の灰毛猫は。憎らしいぶとうな形で遠慮會釋もなう。屋根の上を馬せめる樣に。こはい聲して此三毛を呼出す。先途も下立賣のかゝ樣と。親子たつた二人ゐる樣先の庫の屋根で。此の三毛をかはいけにそれは見られたことかいの。あんまり憎さに竿竹持つて追つたれば。おれを睨んだ目許のこはさ。こりや三毛よ。悪い男持つなよ。灰毛猫が濡れかけたら一度が大事振つて退け。此のさんが從者婿よい男猫添はそぞゐる。地ヲヽかはいやと猫撫聲。にやん〳〵あまへる女猫の聲。洩れてやよそに妻戀の男猫の聲々。三毛は焦れてかけ出づる。地ヤイいたづらもの。大勢男猫の聲がするあの中へ往てなんとする。エヽ氣の多いやつぢやな。こりや男持つならたつた一人持つものぢや。間男すれば磔にかゝる女子の嗜み知らぬかと。地だきすくめても爪立てかけ出づるヤイ間男しのいたづらもの。粟田口へ行きたいなと。後の我身を魂が。先に知らせて祝ひ日にフシ追つかけ奥に入りければ。地玉も續いて立つ所を以春むく〳〵起きあがり。後だきにひつたりと。サア詞美しい女猫とらへたと。乳のあたりへ手をやれば。ア、こそばあ。又しては〳〵抱付いたり手をしめたり。一度が定おさん樣に告けてどこもかしこも紫色に成る程つめらせます。ア、地うるさやと振放す。どつこいやらぬ。本妻の悋氣と鹽鈍に胡椒はお定り何とも存ぜぬ。紫色はおろか身中が樺茶色に成るとても。君故ならば厭はぬ。むごいぞゐむごいぞゐ。詞毎晩々々寢込に御見舞申せども。一度も本望遂げさせぬ。汝故に此の以春名をかへて蟒足の大臣。地玉をとる思案ばつかり。今夜こそいやといはさぬウタヒ一つの利劍を抜き持つて。かの海底に飛び入るぞフシおうか〳〵とだきしむる。どうなりとさしやんせこちやおさん樣にいふ程に。あれおさん樣〳〵。やれやかましい其の外おさん鰐の口。口のついでに口々と顔を寄すれば門口より。賴みませうと臺に据ゑたる鯛蛸。詞あれお客が有る退かしやんせ。いや大事ない蛸持參は女中客といふ所へ。地駕籠乘物下立賣のお袋樣。お出の由を案内す。南無三寶姑の古蛸。是はならぬとフシ云ひすてゝ辿けて奥にぞ

かけ入りける。地程無く駕籠をかき入るればおさん端迄出迎ひ。詞母様ようござんした。父様はなぜ遅い。さればいの父様は。一昨日花の本の連歌の會に夜をふかし。少し風邪氣の有る上に。風早宰相様の朝茶の湯。彌風をひき添へそれでえござらぬ。地先づ〳〵今日は毎年變らぬ初暦商賣繁昌めでたい〳〵。詞以春殿はどこにぞ。悦びで有らうの。推量して下さんせ。御所方方々御嘉例の九獻に醉うて裏の數寄屋にねてゐられます。サア地先づ奥へござんせ。りんやはつお供太儀ぢや。晩にはこちから送らせましよ。六尺ども往なしやゝとフシ親子伴ひ入りにけり。地茅公を出過ぎぬ氣立傍輩ぎ休みしが。炬燵の間より是茂兵衛。こゝへおじやと呼ぶ聲はおさん様。はつと居直りたつた今歸り。詞少酒氣もござれども。若し急な御用もやと云ひければ。さぞくたびれでは有らうが。急に出すことが有る。地こゝへ〳〵と膝もと近く小聲に成り。詞父様の方に面倒なことが出來て來て。談合したいといふこと。地恥をいはねば理が聞えず。知りやる通りの御身代下立賣の居屋敷を。詞町衆の加判で。一昨年三十貫目の家質に入れたけな。それでも昔の株の家。物入續いて此の春又町へも隱し。内證で八貫目の質に入れたを前の銀方が聞付け。それとはなしに此の月の三日限りに。家渡すか銀立つるか。返事次第に五日には目安上けると。足もとから鳥の立つ様に俄に町へ屆けたといの。地いとしやや父様の家渡すも大事ない。目安つけるもかまはぬが。家一軒を兩方へ質に入れたが顯はれては。此の大事ない。目安つけるもかまはぬが。家一軒を兩方へ質に入れたが顯はれては。此の公家衆の御知行納り。三十兩戻る金が有る。ぐに袴も着てゐて。地こゝで一服樂しみぎせる。さらば醉を醒さうかと フシしばし鬼岐阜屋道順が一分が廢るとて。ほろ〳〵泣いてござるけな。詞それで色々扱ひて此の三日迄に。二貫百目の利をやつて事はすむに極つて其の上で銀がない。やう〳〵と一貫目は黒谷のお寺で借出し。まあ一貫目が打つてもみしやいでもないといの。以春様にいうたらばつい埒は明くけれど。地父様も母様も婿に無心云ひかけては。大事の娘にひけがつくと。お年寄のフシ我が強く。以春様へは鼻息も知らすことが叶はぬ。助右衛門にいうたらば又例のしかみ顔。眉間に皺よせて。其の足で以春様にいふは定。詞我が夫をさしおいて手代にいふは何事と。結句物に尾鰭がつく。此の月末にはさるお公家衆の御知行納り。三十兩戻る金が有る。是はおれも知つてゐる廿日程の間のこと。地頼むはそなた許り一貫目調へて。親達の苦を晴してたも。エゝ無念な男の身ならば是しきに親達に苦はかまい。娘産んだ親も損。女子に生れた身も因果とスエテしみ〴〵くどき頼みける。地茂兵衛も一杯機嫌。は

れやれ姫御前と申す者はお氣が細い。 詞五十貫目百貫目でも有ることか。仰山さうにそれ程の銀ぐど〳〵おつしやる事がいの。旦那の印判一つ問屋へ持つて參れば。江戸の爲替二貫目や三貫目常住取遣致します。物ならたつた廿日の間お氣遣なされますな。 地今日の内一貫目急度調へ進じませう。私が少しの間横道致せば事がすむ。といつて盗するでもなく人の目を掠めること。よし盗すればとて身の欲に付かぬは天道が明かなり。お前とてもお主親の恥は娘の恥。 詞二人のお主の恥をすゝぐは畢竟お主の奉公。落ちついて奥へござりませ。アヽ嬉しい〳〵物はいうて見ようもの。かゝ様にも囁いてお心を休めう。そなたに任せた頼むぞや。こりや女子ども。お料理がよくば早う御膳出しませと。 フシ勇みて奥に入りにけり。 地茂兵衛とつくと思案を極め。他人さへ頼まるゝつまる所が主の爲。たとへ仕業は曲るとも。心はさつぱり拭ひ漆の刀掛。主人以春の巾着を明けて奪ふも紫袱紗。印判そつと取出し。いつの間にかは助右衛門戻つて後に有るぞとは。見ず白紙を押しひろげ。 地文言銀目は跡にも書け。先づ印判をとしつかと押す フシ背中に目のなきうたてさよ。 地茂兵衛それ何するとぎかけられてびつくりせしが。ハア 詞助右衛門か。天道は恐ろしい見付られてのけた。一貫目程入用有つて旦那の名代で銀を借る。此の月中に當が有る廿日程の間目ねぶつてたもるか。其方の氣では傍輩の首切らるゝも厭ふまい。 地茂兵衛科は極つた。括りなりと殺しなりと フシ勝手にしやと投げ出す。 詞ヲヽいきずりめ勝手にせいでおかうか。男ども皆おじや。旦那お出なされと呼ばはれば。 地家内の上下何ごとやらんと フシ立騒ぐ。 詞助右衛門鼻をしかめ。旦那是御覽なされ。お前の印判盗み出し白紙に押す曲者。大經師の家を覆し主を賣らうも知れぬやつ。 地請人に預けての括し上げてとひしめければ。おさん親子はは つと許り肝にこたへ胸にしみスエテ色違へする許りなり。以春大きに驚き。日頃程にもない見違へた根性。總じて所帶方商賣事二人に任せ置くからは。事によつて主の印判押すまい物ではなけれども。助右衛門にも知らさぬは私欲有るに極つた。どうした心で印判盗んだ。助右衛門それいはせて聞きや。 地エヽなまぬるい旦那殿とたぶさを取て蟻蝋燭。二三十くらはせサア フシぬかさぬかとねめつくる。 地茂兵衛も髪解きむしられ。ヲヽまだ撲て〳〵踏んでくれ。主の印判盗むとはだいそれた此の茂兵衛。さり乍ら今日迄茶屋の見世へ腰掛けずかるたの打ち様存ぜず。人並に着替は持つ足手纏ひの妻子はなし。何を不足に私欲をせう身體は粉にはたかれても。茂兵衛が口から言譯せぬ。おさん様お袋様詫言など遊ばしたら。未來迄のお恨み。 詞ヤイ助右衛門。天道が物をおつしやれば己れがつらを

打返し。許して下され茂兵衛様と拜ませいで無念なわい。地口惜しいわと齒ぎしみしスエテ顔を。傾け泣きゐたり。詞以春もさすが剛染の下人。いかさま廿年見落しも無い奴。俄に惡心有る筈なも。地言譯せい〳〵といへども更に返答せず。仲居の玉はかねてより。茂兵衛に心をかけ命も棄てんと思ひこむ。志をやあらはしけん主人の前に手をついて。詞是は皆私が賴みし事。茂兵衛殿に科はなし。岡崎にゐられますわたしが伯父様。浪人の營みに暮しかね。五百目餘りの借錢にをひ詰められ。腹を切るとの便あんまり悲しさ。あのお人を賴みまし銀才變してもらひます。地慈悲心餘つて身の難儀眞平御免なりませと フシ誠し。やかにいひければ。地おさん親子は幸と玉出來しやつた有樣にういやつた。人の爲の仕損ひ殊に大事の祝日。連添ふ女房姑が一生の詫言。許してやつて下されと手を合せても合點せず。詞以春彌腹を立て。扨はうぬら

は密通か。此の大經師は禁中の御役人侍同事の町人。不義の上に主の印判盗み押す大罪。今日ははや日も暮れる明日請人を呼びよせ。地段々穿鑿すること 有りヤイ 男ども。詞隣の明星の二階へ追ひ上げ下にきつと番をせい。地油斷するなと言ひつくる。おさん親子は有樣に。いうてよかろか惡かろか。心定めぬ浮草の。茂兵衛は下々に引立られてわるびれぬ性根フシたゞしく哀なり。女どもさびしからんお袋今宵はお泊りなされ。詞舅殿の氣色見舞がてら。我等下立實へ參つて萬事具に咄しませう。それ女房ども頭巾おこしや。是助右衛門。戻りは定めて夜が更けう 地皆早う休ませ。門もしめて火の用心傳吉提灯七外來い。隣の明星に氣をつけよと フシ云ひつけ表に出でければ。地助右衛門は方々の。かけがねしめて部屋に入る臺所には有明の。四角行燈六角堂の鐘こう。〳〵と 三重〳〵ふくる夜や フシ おさんは母御を。寢入らせて。心もしめる寢間着の

露。玉が常の寢所の布團も薄き茶の間の隅。四尺屏風を押しのくれば。玉はねもせず寢所に。スエテ只つゝほりと起きゐたり。ハア是はおさん樣。詞御用が有るならお寢間からお手を鳴しはなされず。見苦しい寢所へ何の御用でござります。ムウそなたもまだ寢やらぬの。別に用はなけれども茂兵衛の難に逢やつたは。皆此のさんが賴んだ事。地それをどうして知つてやら岡崎の伯父にかこつけ。我が身の上に取りなし言譯してたもつた心ざし。餘り〳〵嬉しうて禮いひに來たわいの。地前の世の姉か妹か死んでも思は忘れぬと フシはら〳〵。涙をこぼしける。詞是がまあ勿體ないお禮受けう覺えもなく。お前のお賴みなされたやらどうした譯やら存ぜねども。さつきの樣に申せしは私が心有つての事。いや〳〵譯を知らずには側から出て言譯しやる筈がない。御尤々々御不審の立つ筈。そんなら懺悔致しましよ。地體わたしがあの人に骨身に染んで

ほれまして。地二年此の方くどけども器量に似合ぬ公道な。堅くろしい偏屈な生れつき。奉公の内はいかな事女子の手をも握らぬの。女子の顔は明いた目で。見ることもいやゝやのと愛想づかしばつかりで。やさしい詞もフシかけられず。エヽ聞えぬ嫌はれた。憎い〳〵と思ふやさきさつきの難儀。見やつたの。玉が罰があたつたよい氣味と思ひしが。いや詞さうでない恨といふも戀から起つた憎しみ。戀こそ叶はずとも惚れたは定よ。地こゝで心底見せいではと我が身を捨てた此の玉を。まだ不便とも思やるまいほんに怨めしうござんする。詞それにまあおさん樣の前なれど。さもしいきたない卑怯至極な旦那樣のお心。茂兵衛殿への當りは皆悟氣から起つた事。私にきつう惚れたとて。隙さへあれば抱き付いたり袖引いたり。隙を取つてこゝを出よ餘所にそつと圍うて在所の親も養はう。地小袖やらう銀やらう。うるさやいやゝ聞きともない事ばつかり。詞わたしが身さへ清ければ御夫婦いさかいさせまいと。今ならでは申しませぬ。よその夜咄にわざと夜を更かして。表の男部屋の二階から此の屋根傳ひにあれ。あの引窓の縄を傳うてわしが此の寢所へ。大方毎夜さござんする。餘ンりで腹は立つ見限り果てた旦那殿。悉皆盗人の行儀かおさん樣へ知らせまし。町中へも斷つて出處で恥をかゝせます。必ず恨みさつしやるなと此の女子に叱られて。すご〳〵と我が家の中戸を内から叩いて。戻つたぞよ〳〵と。地お寢間へござる後姿可笑しいやら憎いやら。かゝつたことではござんせぬ。詞所にわたしが茂兵衛殿の肩を持つた故。扨は二人が密通か禁中の御役をして。侍同然の大經師が家で不義者めとの憎しみは。悟氣の當り丁度割符が合ひました。今夜も慥に忍ばつしやるは知れたこと。地今宵こそ聲立ててお前に告げうと覺悟を極め。帶も解かずに此の通りお前も嘸お腹立。いかに家來なればとて侮つたほれ樣ぢやと。忌へば腹が立ちますとフシ涙を流し語りける。地おさん溜息横手を打ち。詞扨も〳〵今の世の賢女とは其方のこと。男畜生とはつれあひ以春殿。女房一人守つてゐる男とてはなければども。地あんまり女房を阿呆にした踏み付けた仕方。涙がこぼれて腹が立つ。詞なう此の上に無心が有る。そなたとおれと代つてこゝにおれを寢させてたも。いつもの格で以春殿がござる時。泣いつ恨みつくどかせ。今宵は玉の靡きやるかほで夜の明くる迄だいてねて。内外の者の見る前。地幸ひ母樣泊つてなり生恥かゝせて本望遂けたい。其方の寢間着の綿袍も貸して寢代つてたもらぬか。詞それはお易い事なれど召付けぬ木綿夜着。お肌が冷えてたまるまい。エィなんのいの。昔の井筒の女とやらは妬のほむらに提子の水が湯となつた。男の恨みに身が燃えて寒さ冷たさ厭はぬ平に頼む。詞そんならばともかくも隨分拔から

しやんすなと。猶引き包む此の屏風。火を吹消してうば玉のオクリ玉は〳〵奥にぞ入りにける　フシ科なき科に。地埋れし茂兵衛はつく〴〵と思へば玉が志日頃つれなき此の男をスエテ女心に恨みもせず。仇を恩なるフシ詞の情。恥かしゝとも面目なし。たとへ此のまゝ死するとも一生一度肌觸れて。玉が思ひを晴させ情の恩を送らんと。目ばかり出す深頭巾明屋の二階忍び出で。主屋の屋根を四つ這の姿を人に咎められ。又此の上に盗人と名をや埋まん柿茸。昨日の雨の乾かぬに今宵の霧の淺じめり足の踏處も上滑りそろり。〳〵と。引窓の下を。覗けば常聞にオクリ何の〳〵先途は見えねども。家の勝手は覺えたりそれを心の力縄。手繰る心も細引と　フシ共に切れ行く心地なり。足音よそに知られじと柱をさすり壁を撫で。目は明きながら盲目の杖を失ふ如くにて。數居を一つ二つ越え三つ暦の細工所の。次の茶の間に玉が寢る疊はいづく摺り足の。屏風にはたと行きあたり。びつくりしたる膝顫ひおさんもはつと胸騒ぎ。スエテ身も顫はるゝ空寢入。屏風そろ〳〵押しやつて夜着にひつしと抱きつき。搖り起し〳〵。搖起されて驚きの今日の覺し風情にて。頭を撫づれば縮緬頭巾サア是こそと頷けば。男は今日の一禮の聲を立てねば詞なく。手先に物をいはせてはスエテ伏拜み〳〵心の。たけを泣く涙。顔にはら〳〵落ちかゝる其の手を取つて引寄せて。肌と肌とは合ひながら心隔たる屏風の中。緣の始は身の上の　フシ仇の始と成りにける。地すでに五更の八聲の鶏門の戸けはしくとん〳〵〳〵。詞旦那お歸り。はつと消え入る寢所に汗は湖水を湛へたり。詞やい〳〵戻つた明けいやいと。地呼ばはるは以春の聲。助右衛門目をさまし。どいつらも大臥と提げて出でたる行燈の光り。顔を見合はす夜着の内ヤアおさんの樣か。茂兵衛か。はあはア、　三重フシ京近き。地岡崎村に分限者の。下屋敷の取葺屋根。見る影細き釣行燈太平記講釋。赤松梅龍と記せしは玉が爲には伯父ながら。奉公の請に立ち　フシ他人向にてくらしけり。講釋果つれば聞手の老若出家交りに立ちかへる。詞なんと聞事な講釋五錢づつには安い物。あの梅龍もゝう七十でもあらうが。一理窟ある顔付きアゝよい辯舌。楠湊川合戰面白い胴中。仕方で講釋やられた所本の和田の新發意を見る樣な。いかい兵でござつたの。地何れも明晩々々とオクリちりぐ〴〵にこそ別れけれ。大經師助右衛門駕籠を先に押立て。梅龍宿におるやるかと明けんとすれば門の戸は早しめたり。ハテ門しめたしめぬとて盗人に取られゝ物も有るまいがと。割るるばかりに戸を敲く梅龍内よりつこど聲。詞かましい何者ぢや。此の家に聟はない。講釋ならあす來い〳〵。イヤ講釋聞きたうない。大經師以春手代助

右衛門ぢや。地急に逢はねば叶はぬと頻りに叩けばせはしない。明くる間も有る物とによつと出でたる糟尾の合總。紙衣の廣袖革柄の大脇指。詞ヤ助右殿。地夜中にはしい何の用でござるといへば。詞なんの用とはをさめ過ぎた。此の中毎日人をこし。そなたが請に立つた玉が事につき用が有るといへども。酢の蒟蒻のと我儘いうて顔出しもせぬ請人が。どこの國に有ること。此の月朔日明くれば二日の曉。且那外より歸りの門口。擦り違うて手代の茂兵衛めが内儀おさん女郎を唆かし走り出で。やれ〳〵と云ふ内に行方が知れぬ内を詮議すれば。玉めが寢所におさんぢよろと茂兵衛が寢た體にて。玉めはおさんの寢間に入り代つて寢てゐた。然れば主人の内儀の。間男の媒した玉めなれば同罪は遁れぬ。地おさん茂兵衛を尋出す迄請人といひ内證は伯父姪ぢやけな。其方にきつと預けに來た。二人の者が磔なれば玉は獄門。慥に預けたそりや駕籠入れと。舁き込む所を梅龍棒端つかんで二三間押戻し。詞是お手代。此の赤松梅龍が姪などを。むさと前垂奉公などに出す物ではおりない。二親も無いやつ漸伯父が太平記の講釋。暮六つから四つ時分迄口をたゝいて一人に五錢づつ。十人で五十錢の席料を以て露命をつなぐ。素浪人の伯父が力には。絹氣を引張らせて腰元奉公に出すこともならぬ。大經師の家は常の町人とは違ひ。國王大臣も一年の饒となさるゝ暦の商賣。日月の廻りを明らかに記す物なれば。畢竟月日に奉公すると觀念して。大經師御手代衆奉る奉公人玉。請人赤松梅龍と判を据ゑたは姪が不便なればこそ。國許では人並に武士の眞似をして。鉢坊主の手の内程米も取つた此の梅龍。預け者には受取り渡しの作法が有る。此の家僅か三間に足らぬ小借屋。めぐりに細溝掘るや掘らず薄壁一重塗つたれども。身が爲の千早の城郭。六波羅の六萬騎にも。落されまいと思ふ所にどこへ見苦しい駕籠舁が泥臘。地サア改めて渡せと辯舌は講釋事の道理は太平記。形は安東入道がフシ理窟をこねるもかくやらん。詞あた仔細らしい威立置いてもらを。武士でも侍でも此の助右衛門はなんともない。地改めて請取れと駕籠打明け。高手小手の縛り繩引つ立てゝ引出す。玉は涙に目も顔も水より出たる如くにて。伯父樣面目もござらぬとわつと叫びし顔を見て。鬼の樣成る梅龍も涙を咽にギンつまらせて歯がみを。なすぞ道理なる。地玉は恨の身をふるはし是助右衛門。詞物には料簡品も有る。地おさん樣茂兵衛殿一所に退いての上なれば。間男でないといふ言譯はなけれども。かう成り下つた初りは以春樣の惡性と。そなたの心の佞人から。詞おさん樣にほれた間男と云ふはそなたぢや。腰元のかやをだまして。何やかや取らせて頼んだを知つてゐる。もう言はう〳〵と思うたれどいやく〳〵人の損ねること。とかくおさ

ん様に疵さへつけねばよいと思うて。此の玉がきつと目になつて。おさん様の側を一すも離れぬ様にしたによつて。かやめもいひ出す折が無かつたやら私をけぶたさうにして。其方の文を横いて捨てをつたも見てゐる。それを妬に思うて針を棒に取りなして。地此の様にしなした。己れを磔にかけ。かやめがまつ此の様に縛られ獄門にかゝる奴なれど。此の玉が慈悲心一つで助かつた。此の頃是をいはうとすれば言ひ消し言ひ消し人でなしめ。慈悲が仇になつたかとスエテかつぱと伏して。泣きければ。詞ふんばりめ。血迷うて何ぬかす。地請人慥に預けたと云ひ捨てて立歸る。梅龍飛びかゝりほんのくぼ引摑んで引き上ぐれば。足を爪立て是なんとする。詞なんとするとは縛るさへ有るに町人の分で。なぜ本縄に縛つた。急度訴へて處刑にする奴なれど。御免なれとぬかして解きをるか。〳〵と締めつくるあいたゝ。詞只の町人と違うて。禁中のお役をすれば本縄にかけても大事ない。解いてほしくばそつちで解け。ヤアうぬめは縄付で預くるさへ。昔から無い作法に禁中の御用を聞く町人は。本縄かけても大事ないとは。どこから出た掟ぢや。地上を輕しめた慮外者。どうしても大事ないと駕籠の棒引抜いて。力に任せ七ツ八ツ片息に成る程ぶちのめされ。詞己れ助右衛門をぶつたぞよ。ヲヽぶつた。身がぶつたが誤りか。地御裁き所で埒明けうサアうせうとひつ立つれば。そんなら待ちをれ解いてくりよ。ヲヽ解かせいで置かうかま一つ棒を喰ふかと。きめ付けられて不承々々に縄ひつほどき。詞こりや慥に預けた。所の庄屋にも斷つて歸るぞ。一寸でも取り逃したら請人共に首が飛ぶが合點か。地まだ願をきゝをるかと頬桁三ツ四ツ喰はせて。玉が手を引き内に入り ッツ繋金はたとしめにける。地駕籠の者ども笑止がり今のはいかう痛みませう。地駕籠でお歸りなされといへば助右衛門顔をかゝへ。此の筈〳〵。今年はこゝが金神に當つた。地それでこれ方崇殊に今日は土用の入り。それで跡がきつうどよむ。暦のことは押されぬと オクリへらず口して歸りけり フシむすぼれて。地なまなか辛き亂苧の。おさん茂兵衛は夢にだに。戀せぬ中の戀と成り。スエテつれて走りし其の日しも。茂兵衛が肌の紙入にたつた三歩のかねてより。思ひもあへぬ フシ旅の道。おさんの肌着代なして。白無垢一重憑法に。据模様ある蘆に鷺足に任せて奈良堺。大津伏見をうか〳〵と。夫婦にあらぬ夫婦の様神佛にも人間にも。疎まれ果てし身の上やと。互の心恥かしく顔打上げて顔と顔。見合せ顔を赧めては フシ涙の。外に詞なし。詞なう茂兵衛殿。とてもわしらは今日あつて明日ない身。命を命と思はねどもいとしや玉はどうなりやつたと。案ずるは是ばかり。地只ゆかしいは父様母様なんぼ思ひ諦めても。逢ひたうござ

るとむせ返りスエテ歩みかねて泣きければヲヽ逢ひたいはお道理我とても。お目かけられしお主筋お名殘惜しさは同然。詞こゝが彼の玉が在所岡崎。あれあの行燈の出た所が則ち伯父の宿。是にたよつてお里の便宜玉が嘗も。聞かうと存じ參りしが。地内の首尾を聞合せず案内するも粗相なりと。軒に立ちより窺へば。内には玉が泣聲のわけも聞えずくどきごと。伯父梅龍が聲として。ヤイ玉。

調　此の本は是伯父が毎夜講釋する。太平記廿一卷目尊氏將軍の執權。高の師直と云ふ大名鹽冶判官と云ふ。是も歴々の武士の妻に心をかけ。末代迄惡名を殘し。鹽冶判官もそれ故命を失うたは。もと侍從と云ふ女が媒から起つた事。おさん殿と茂兵衛と眞實の間男で　いに極つても。二人連て駈落めさつたは定よ。此の二人に何方で逢うたりとも。萬一此處へ尋ねてござつたとも。必ず〳〵物いふ

な見ぬ顔せい。かういへばつれない水臭い様なれどさうでない。間男と云ふ浮名の立つた二人の中へ。媒といはるゝ其方と三人寄つた。そぶりなりとも人に見られてはそりや一ッ穴のいたづら狐。一所に寄つたは扨こそ玉が碎で。おさん茂兵衛が不義は極つたと。いひ立てられては彌ク科が重うなる。こゝをよう合點せい。つれなう當るはお爲ぢやぞ。此の事故にそちも憂き目の恥に逢ひ此の如く預けられた。然れば同罪は遁れ難い。地首を斬られ手足をもがれ試し物に成るとても。主と頼んだ人故命惜むな梅龍が姪ぢやぞ。最期を清う死んでくれと聞ゆれば玉が聲。同それは氣遣さしやんすなとうから覺悟極めてゐる。伯父一人姪一人わしが死んだら伯父様の。地さぞ便りなう思召そ茂兵衛殿はどうしてぞ。いとしいはおさん様どこにどうしてござるやら。常がはかない正直な心を知つたわしなれば。何かに思ひやりますと泣き入れば梅龍も。ヲヽ同そちがいとしいはおさん殿。身は下立賣の親御達の。歎が思ひやらるゝと。地内に伯父姪くどき泣き外に二人が立聞いて。涙をもらす戸の隙間。聲なき冬のきりぎ〳〵す フシ壁に縋りて泣きゐたり。地血筋が結ぶ親子の契り。おさんの親道順夫婦娘の浮名隱れなく。命がつらき老後の恥人に面も合はされず。月出ぬさきの心の闇。黒谷の菩提所へ徒の夜道の女夫連。小蠟が下けし風呂敷や フシ包む涙にとぼ〳〵と。地行過ぐる軒の下二人しく〳〵泣聲の。耳に留れば立ちどまり。お堀あれ合點のいかぬ何者やらと。疎き老眼すかして見る。行燈の陰に茂兵衛見付け。あれおさん様 同下立賣の親爺様。地ナウ父様かいのと走り寄り。取り付く所をついと退き。同ヤイ畜生に父様と。いはるゝ覺えは地ないわいやと。わつと泣く〳〵振上げて。打たんともがく杖の下母はあこがれ火を吹きけし。娘を袖に押圍ひ。同なう親爺殿おさんめは逃げました。地もうこらへて下されと影をかくすは母の慈悲。打つ杖は父の慈悲心かはると子や思ふ。哀れは同じ涙の間。逃ひの上の逃ひなり。道順不覺の涙にくれ。同ハヤ道順が未來も早知れた。一人娘の事なれば婿を取つて。家を嗣がする筈なれど近年諸國の金も渋まず。家屋敷をも人手に預ける逼塞の身。此の跡を娘に渡し苦勞さする可愛さに。一代切に家を捨て嫁入させた親心。先とても其の合點道順が娘ならば。地拵入らぬ土産も入らぬ。育てた親に見込が有る。娘の心が土産ぢやと慕はれた根性に。畜生の魂がいつの間に入り替つた。恨めしや情なや。アノ同池に棲む鴨や鴛鴦を見よ。軒に巣をくむ燕も雌一羽雄一羽。女夫番は生有る物の習ひぞや。地父親さまざまの毛色を産むは犬猫ならでどこに有る。親は犬には産みつけぬ猫になれとは誰が育てた。同畜生に對して詞は交さぬ。是は我が獨語。とてもかう成るからは山の奥

にも身を隠し。地遁るゝたけは遁れもせず京近邊を狼狽へ。今の間に召捕られ洛中を引渡され。親が大事に産みつけて撫で育てた體を。鐵で突かれて死にたいか體にも恥がかきたいか。詞生けうが死なうが此の道順は。悲しいとも思はねば涙一滴こぼれねど。地嫗の泣きやるが悲しいと。わつとばかりに堪へかね餘所をも恥ぢず大聲上け。女夫は老の息切れにフシむせ返。りてぞ歎かるゝ。地茂兵衛は平伏してとかうの詞泣くばかり。おさんは母に抱き付き二人に不義の誤りは。微塵程もなけれども本の因果のまはり合ひ。言譯立たぬ品と成り京洛中に畜生の名を流し。詞の當つた此の上に。誓文立てん樣もなし。父樣のお腹立ち母樣のお恨みも。私可愛い上なれば來世をかけて形見の詞。我々は天の網とても遁れぬ命の内。親達に逢ふからは木の空に曝されて。屍を鐵で突かれても思ひ置くことござらぬと。口說き歎けばまだぬかす。詞其の鐵で突かせまい木の空へ上げまいと。地愚うて胸を焦すわやと フシ又絮え。入つて泣き沈む。地母は涙の數珠袋袱紗物取出し。詞是一歩二つ白銀も少し有る。いとしやいかう肌薄な路錢につきて脱ぎやつたの。是を茂兵衛に渡して駕籠に乘せて京の地を。地一足も早う立退いて必ず〳〵悲しい事。聞かせて泣かせてたもんなと。泣く〳〵渡せば フシ押戴き。詞忝うござんする。中に着た淺黄縮緬は奈良の町で賣放し。此の上に着た羅は鷺。此の秋お前の下されて。地未來迄も母樣の形見と思うて着ますれば。寒いとも覺えず見つけらるゝをそれ切りの。命の内は袖乞でも厭みないは後世のこと。是は其の儘とめ置いて死んでの跡の弔にと。歎けば母もアヽ悲し。又死用意ばつかりをと盡きぬ涙の露霜の。白きを見れば夜も更けて。出でたる月は冴えながらフシ親子の袖ぞしぐれける。地茂兵衛はかきくれ物をもいはずるだりしが。詞我等男の面を下げ斯樣の業を仕出し。のめ〳〵存らへ在る事も。おさん樣のお命を何卒と存ずる故。お宿許へおさん樣を御同道なされ。地お命助け下されば科を私一人に受け。物の見事に死にましたい御料簡頼み上げますと。手を合せ泣きければ。アヽ詞愚かしいこといふ人ぢや。我一人生き存らへ言譯が立つ程なれば。二人生きても同じ事。取違ようがどうしようが以春と云ふ男持ちながら。其方と肌觸れ寢たは定形は生れ變つても。地此の惡名は削られぬ。其方はいかう狼狽が來たさうなと。恥ぢしめられて茂兵衛もアツアさうぢや。ハア詞あれ三條通の車の音夜明というて程もない。行く先當處は無けれども私在所。丹波の栢原迄落ちて見るばかり。サア地暇乞なされませと。いへども親子一生の生死を爭ふ今はの別れ。月出ぬ先は顔見えずいつそ思ひ切るべきに。見かはす顔は見きられずなまなか月も恨めしく。母は悶えてこれ親爺殿。詞脈のあがつ

た死に病ももしやと藥は盛つて見る。天にも地にもたつた一人の大事の娘。見付けらるゝと殺さるゝ手放してやられうか。ごされ爺媼附添うて死んば親子一時にと。氣ち狂亂の口說事道順も堪へかねて。詞それはおしやる迄もない。いか成る大病難病でも藥一味の加減にて。助かるもある。習ひ息の絶えた死人でも廿四時は待つて見る。唐天竺日本國の名醫の藥を浴せても。天下の法を背くといふ大病にはかなはぬぞや。たつた一つの賴みには以春の方へ手を入れて。心を宥め見るばかり。地もし其の內召捕られすは最期といふ時は。白髮頭を大地の底へすりつけて。命乞も身替りも願ふといふは其の時よ。なまじい親がかくまふと聞えては先に我が立つて。許したつても許されぬ親下人にも見放され。憂目をすると聞えてはけには先に憐み有り。詞ヤイおさん。畜生よ犬猫よと叱るとて恨むるな。願かけぬ神もなく祈らずと云ふ佛もなく。三光天を拜むとて。地七十に成る道順が朝每垢離を取る時は。總身の骨は氷れども娘が處刑に逢ふならば。此の苦みを百千萬重ねても物の數かはと。こらへて月日を拜するはあの月天子の照覽有り。利生は無下にはよも成るまい。詞茂兵衛賴む煩はすな。是こゝに銀子一貫目。家質の利息のたし銀に。黑谷の和尙樣より借つたれども。地世間張つて何にせん家を町へ突出し。寺へ返す此の銀やるというてはやられぬ。貰ふというては貰はれまい。道順が淚にくれ狼狽へて落いたぞ。落した物は拾ひ德間があたれば落した者。拾うた者に罰はないお媼おじや歸らうと。女夫せき上り咽び入り二足三足立ち去れば。おさん茂兵衛わつと泣き銀取り上げて額にあて。あんまり深い親の慈悲却つて冥加が恐ろしい。なう父樣母樣と呼び返せば振返り。詞なんにもいふなんにもいふなさらば。地〳〵の泣き別れ父が歸れば母が止め。母が歸れば父が止めおさん茂兵衛は步みかね。名殘惜しさに立止り小高き土手に伸上り。二人見送る影法師賤が軒場の物干の。柱二本に月影の壁にあり〳〵映りしは。憂き身の果ては捕はれて フシ罪科。のがれぬ天の告。地母は驚きなう爺樣情なやこゝに磔が。詞悲しやお媼。おさん茂兵衛が影法師。地天道の力にもかなふまいとの知らせかと。スエテ又堪へかねて泣く聲に。地內より玉は潛り戶明け顏さし出す其の影の。同じく壁に映りけりあれ又此所に獄門が。あさましや此の首の其の名は誰と白露の。玉ではないかおさん樣さらば〳〵の聲の中早黑谷の後夜の鐘。生滅々と響きくる。果は寂滅爲樂ぞと名殘。悲しき 三章

下之卷

春立つと。フシ去年の雪けを。其のまゝに。地霞むも山の奧丹波軒の氷柱も解け渡り。谷の水音しつたん〳〵。ほん〳〵〳〵と鳴る鼓。萬ぎい德若に御萬歲と御代も榮えまし

ますありきやう有りあら玉や。年立ちかへる朝より。水も若やぎ木の芽もさし榮えけるは。誠にめでたう候ひし。京の司は關白殿。退位の御門日のもゝ内裏。王は十善神は九善。萬やす〳〵。浦安が木の下にて。正月三日の寅の一點誕生まします。若夷子商ひ神と。現れ給ひて商繁昌守らせ給ふは誠にめでたう候ひける。ハヤメやしよめ〳〵。京の町の優女賣つたる物はやしよめ。賣つたる物は何々。大鯛小鯛鰤の大魚鮑榮螺。蛤こ。〳〵。蛤こうと賣つたる物はやしよめ。京の町のやしよめ其所をば打過ぎ。詞側の棚見たりや。側の棚見たりや。豆に小豆。大根蕪。加賀の牛蒡毛牛蒡。辛子の粉山椒の粉。辛い胡椒召さいの。やしよめ〳〵。京の町のやしよめと賣りためて千貫。つなぎ立てゝ萬貫。地恵方の御藏ずつしり納めて。家も福々爺樣媼樣父樣母樣。和子樣姫御前產みならべてふく〳〵ふく〳〵。フシほゝんほんとそはやしける。詞ヲヽめでたい〳〵よう祝やつた。とゝ樣かゝ樣御無事な萬歳祝ひましよ。地なほ御壽命は百包。盆に入れてさし出すおさんの顔を不思議さうに。詞ハヤ是は奥樣お久しうござりまする。御機嫌よう變つた所で正月をなされまする。アヽつがもない。わしは萬歳に近付はないわいの。なんの私等を見覺はなされますまい。毎年お庭で舞ひましてお前はお上に結構な布團しいて。腰元衆つらりと並べて御見物なされました。京烏丸大經師の奥樣よう覺えて居りまする。田植が御好きでござりました。地なんと一つ舞ひましよかといへばおさん胸騷き。詞目かどの強い人ぢやの。毎年の事でも此方はすきと覺えぬ。地必ず〳〵何方でも沙汰してたもんな。わしが里の父樣此所へ去年から逼塞してござる故。此の頃漸う見舞に來た。詞此の在所でわしは島原の傾城が。請出されて來てゐると。庄屋にも誰にもいうて置く。もし人が問うたりとも島原で見た女郎ぢやというてたも。少樣子も有る程に京ではなほ沙汰なし。地頼むぞや〳〵さらばまちつと祝はうと。錢ざしぬいて五六十半紙二枚に漏すなと。我が名を包めば惜しからず。ハヤ詞重ねゞおめでたい。二三日中に京へ出まする。烏丸へも參り御嘉例の如くお手代衆。地助右衛門樣茂兵衛樣とお盃致しましよ。御無事な通り咄しましよと出でんとすればなう是々。詞其の烏丸でなは隱したい。アヽ酒に醉うたら忘れてひよつといやれば悪い。地此の春はもう烏丸へは行かしやんな。來年めでたうわしが上つて祝ひましよ。烏丸の代りに此所で盃出したいが。折しも酒をきらした是で飲んで下されと。二三匁の豆板二ッ飲ませぬ樽の口塞ぎ。ハヤなんの是で申しませう。本の樽より結句木樽に醉ひましたと。うまい目にあふ萬歳の フシ舌皷打つて出でにける。地おさんも浮世恐ろしくうつかりと成る所へ。茂兵衛も色青うして立ちかへる。詞エヽき

り〳〵戻りはせず。此の身に成つて恵方参り所か。地たつた今毎年京へ來る。得意の萬歳がきて不思議立てたを。につこらしう嘘ついて往なせごとは往なせたが。どうやら此處にも怖氣が立つて長うゐられよと思はぬと。語れば茂兵衛もあきれはて。詞サア〳〵盆も正月も一時に來ました。天知る地知るでこつちこそ見知らね。今の萬歳の格で。栗實の柴實のと丹波から京へ出る者は多し。あれが言ひ是が聞き知れたも不思議でござらぬ。助右衛門めを始め旦那の一家が隣在所に宿取つてゐるけな。其の上たつた今但馬の湯入りを乗せて通る駕籠昇か。面妖な事をいひました。大經師のおさんが奥丹波に隱れてゐる樣子が知れて。京のお役所からこゝの代官所へ解狀が着いて。在々を尋ぬる其の使の早駕籠を乗せて。老の坂の下り口から二里の間を壹貫四百。地七百づゝあたゝまつたとたつた今いうて通りましたと。フシ身を慄はしていひければ。地ハテなんとせう今迄が不思議の命。されども父樣母樣の歎の程がおいとしい。一日でも存らへるが孝行。今夜の中に退かうでは有るまいか。詞いかにも〳〵かのお心ざしの一貫目二百目遣うて。残る八百目此の家主助作に預け置きました。大事のお慈悲の此の銀を此方とわしがきつと抱かへて死ねばとて。人の實になす事は冥加に盡きると思ひ今寄つて申したれば。追付け持つていかうと申す。地此の銀を腰に着け。丹後の宮津に兄弟同然の者が有る。其所迄どうぞ退きませうそれ迄に運盡きて。死ぬる期に極つたらば。日頃申す通り悪縁と思うて下されませ。私故に大事のお身を棄てさせましたと涙ぐみスエテ打ちしをれて見えければ。地又同じ事ばかりそれは互の因果づく只忘れぬは二人の親。扨いとしいは幼馴染の以春樣。こなたもわしも微塵濁らぬ此の心。言譯して死にたいと又さめ。フシ〳〵とぞ泣きゐたる。家主の助作案内もせずつつと入り。詞ヤア新六樣さつきは御出でなされた。預りの八百目たゞ置くよりはと。少手廻し致し急にはどうも調はぬ。一兩日待つてもらひましよ。こな樣もあんまりな。地あの樣な傾城殿請出した上に。銀遣ふといふ樣な昔の心おやめなされと云ひければ。詞いや是助作さん。あのさんの入用ではないわいな。皆わしが入用ぢや勤の身はな。全盛する程世間が張つて辛いものでごんす。懇な客から借つた銀で。今宵中に返やさねばわけが立たぬわいな。其代りにあのさんの勘當が許りて大阪へ往なんしたら。夜でも夜中でもいうてごんせ。地八百貫目や八千貫は書文くつされ。フシ利なしでやすんといひければ。詞あの通りあの通り。近頃御苦勞千萬ながらどうぞ頼み存ずる。ムヽいかにも聞き屆けたそれ程念なと知らなんだ。地七ツ過暮迄にきつと持つて來ませう。女夫の者の請取とる必ず内にござれや。ヲヽ動きもしませぬと約束堅き。銀が

敵と知らざりし ッシ身の成る果てぞあさましき。扨々とろりと一ぱい參らせた。詞今の傾城の物眞似芝居御好の一德。地銀請取ると其のまゝかけ出して急いだら。夜の中に七八里は心安い宮津に落着き。切戸の文殊の法印樣に母方の緣あれば。頼むに引きはなされまい。そろ〳〵用意と帶しなほし身拵へする中に。鹿棒の音人足頻りに近付きたり。詞ヤア氣味惡いハアなむ三寶口惜しい。助作めに出しぬかれた。地おさん樣もう遁れぬ未練な働き遊ばすな。ヲヽ覺悟した合點ぢやと。表を見れば捕手の役人。助作を先に立て捕つた〳〵。捕つた〳〵と亂れ入る茂兵衛膽せずつゝと出で。詞見苦しいお侍。合口一本さゝぬ町人手向ひは致さぬ。悴の時より柔術當身を稽古して。すはといはゞ腕は細くとも。お侍の五人や七人は慮外ながら。ぎやつと言はせてのめらせやうも知つたれども。元の起りは主人の勸氣。主人に手向ふ同然と思ひ手向ひは仕らぬ。此の女中に付き申譯あれどもそれも入らぬもの。不義ならば不義にしてサア尊常に括れ。地捕つた〳〵と引伏せ〳〵高手小手。顏色變ぜず縛られし男も女も健氣さに。捕手の武士は我を折つて ッシ哀れといはぬ人もなし。おさん凉しき目の中にて助作をはつたと睨み。詞エヽさもしい土百姓。汝少しの慾にめでてよう訴人しをつたな。申し殿樣。あいつに八百目の銀を預け置きました。地かうなつた身に金銀は入らねども是は親の情の銀。京へ上して黑谷へ上げて下されませと。いひもきらぬに助作まが〳〵しき顏つきにて。詞アヽ恐ろしい女め。いつ汝に粒三文も借つた覺はない。五十日ばかり家賃して。宿賃の米の味噌のと算用したらば二三百目來る筈ぢや。地八百目預けたとは生騙めと。爭ふ所を茂兵衛縄取引立て。助作が横腹はつたと蹴倒し。詞是しきの目腐銀。おのれ風情に儘いはうか。よい〳〵汝にくれた。地八百目の銀うぬが根性相應に。現世は長者と悅んで閻魔の前で算用せいと。面骨三ツ四ツ踏みつけ〳〵ッゝさらぬ。顏にてゐたりけり。かくと聞くより助右衛門嬉しけに走り付き。詞私は此の度お願ひ申上げし御領内助作が從弟。京大經師以春手代助右衛門と申す者。御苦勞千萬におさん茂兵衛御搦め下され。我々主從本望大悅仕る。地縄付二人請取早々上り申したし。お渡しなされ下されと謹んで陳べければ。詞役人氣色をかへ其奴引きのけ。推參至極な縄付を渡せとは汝に頼まれ捕りはせぬ。京都より解狀によつて搦めとる。すぐに京の牢屋へ引渡す。殊に段々詮義ある者。慮外をぬかしたら地汝ともに搦めると叱られて助右衛門。揉手をして退く所へ赤松梅龍。早駕籠にて駈け着け首桶提げつか〳〵と出で。詞我等は大經師以春が下女。玉と申す者の請人卽ち伯父。赤松梅龍と申す者。此のたびおさん茂兵衛駈落の事ゆめ〳〵兩人の不義はなく。此の玉が

よしなき言葉を聞きちがへ嫉妬の心餘つて。地間違の誤りにて思はず不義の虛名を取ること。詮ずる所玉めが口からなす業科人は一人。則ち玉が首討つて參るからは。兩人の命御助け下さるべしと蓋を取れば玉が首。おさん茂兵衛は一目見て。早先立つたかはかなやと スエテ消え〳〵とこそ成りにけれ。代官の役人手を打つて。詞ハア、早まられた梅龍。此の兩人の囚人は科の實否定まらず。京都に置いて中立の女。其の玉を證據に詮義あらば事の次第明かに顯れ。地兩三人共に助かる事も有るべき物を。肝心要證據人の首を討つて。何を證據に詮義有るべき知邊もなし。殘念々々二人の罪科は極つたり〳〵。首も一所に京都へ渡せ早早罪人引きませい。承るとひつ立つれば梅龍つゝ立ち地だんだ踏み 詞エ、〳〵早まつた仕損じた。地七十に及ぶ梅龍が出來したてして一生の誤り。むだ〳〵と腹切るもひとり物に狂ふに似たり。相手がな欲しやなあ。ヤア助右衛門よい相手。汝を切つて人を殺した過りと。共に罪科に行はれんとするりと拔いて打ち付くれば。眞甲をしてやられ フシ朱に成つて逃けたりけり。地首を取らずに置かうかと駈け出づるを大勢取りつき。狼藉させぬ粗忽させぬとだきとむる。狼藉合點ぢや放せ。〳〵と駈け出すも止まるは老の力にて。止らぬ物は科人を引行く駒も目に涙。轡にかゝる白泡の哀れを。殘す 三重

おさん茂兵衛こよみ歌

乘る人。も乘せたる駒も。遂に行く。フシ道とは知れど。最期日の。今日か明日かの我が身には。我のみ消ゆる心地して。數多の人のフシ命乞。それを杖とも柱曆の紙破れて。向ふ其方は都の惠方。ふたりが身には金神と。思ひ返せば胸塞り。月塞りの駒の足オクリ蹄行く。駒の世のたとへ八十八夜は及びなき。スエテ年は十九と二十五の。名殘ら〳〵ほろ〳〵繩目に傳ひ。フシ鞍壺に傳ふ涙の十方ぐれフシ オクリ泣く泣くへ引かれ。行く姿 フシよその見る目も。哀れなり。人目盜みて現れて。地不義ぢやのなんの庚申今日は明日の甲子と知らで逢ふ夜の其の報。世上の口に謠はれて。合せて見てもあはぬ中。丸い苧桶に角の蓋。眞苧績みためて。綯ひまぜて今は我が身の縛繩。讃を受けん情なや。サイモンおさん茂兵衛にいふやうは。由なき女の恪氣故。なんの咎なきそなた迄。あれ不義者と危日フシつひに命のほろぶ日。湯殿始にて。身を清め新枕せし姫始。かの着衣始引きかへてひかるゝ駒のくら開。スエテ思へば天一天上の。ギン五衰八專間日もなしたゞ何事も坎日と聲もう涙にかきくるゝ。歌茂兵衛やう〳〵顏を上げ。こは愚かなりおさん樣。火に入り水に入ることもさだむ因果と諦めて。せめて未來の黑日を遁れ。二季の彼岸に到らんと念じ給へや南無阿彌陀。南無阿彌陀佛を帆にあげて。

共に弘誓のウフシ船乗よし。紅蓮の井戸掘焦熱の。地獄の釜塗よしなやと急がぬ。冷泉道を。いつのまにニリ。越ゆる我が身の死出の山死出の。田長の。フシ田がりよし。野邊よりさきを見渡せば。過ぎし冬至の冬枯の。木の間〳〵にちら〳〵と拔身の槍の恐ろしや。シテあれで其方の身を突くか。ワキ是でそもじを殺すかや。シテ血忌も今は僞りと。二人二人は顏を打合せ。くどきこがれて泣く涙フシ馬の尾髮やひたすらん。ツシまた冴えかへる。夕嵐雪の松原此の世から。かゝる苦患に往亡

日。島田亂れてはら〳〵〳〵ハヅミ頼には。いつの フシ半夏生。縛られし手の冷たさは。我が身一つの寒の入。ギンハルフシ涙ぞ指の。爪取りよし袖に水を。フシ結びけり。スエテつく〳〵物を案ずるに。シテタ、キ我は劍の金性の。及にかゝる約束か。ワキわしは土性墓の土。何とて墓に埋まれず。シテ遂に木性の木の空に。ツキ屍を曝し。シテ名を晒し。二人なんどナホス小歌に作られて。強き處刑の粟田口。オンド蹴上げの水に名を流すおさん茂兵衛が新精靈。恥かし乍ら手向草。同じ罪科の下女が名の。玉は冥途に通へども。魂魄此の世に止つて共に浮名はくだすとも。冥途は主從一所にて娑婆で手なれし玉が業。無間の釜で茶をわかし。往來の人の。回向うけ。我が身の悟り。フシ開く日。ア、慨くまじ今更に。何くよ〳〵と凶會日の。悔むもよしな引寄せて。ハルフシ結べば露の。命にて解くれば元の道芝に。やがて亥子や五里六里十死も過ぎて〳〵是ぞ此の小川通りは三途の河。牢の町さへ近づけば見物集取々の。暦が噂繰返す思へば私が嫁取よし。我が昔の元服よしの日取りもよしや蘆に鷺。裾の模樣も繪に寫し。筆に列ねて末の世に語り。續けて 三重〳〵聞き及ぶ。フシ道順夫婦。地群集の中を押分け〳〵。犯せる罪が重ければ又慈悲といふ名が重し。磔にも獄門にも此の爺媼を代りに立て。二人を助け下されやれ。おさん可愛いやと縋りつけば警固の者寄つたら打つと追ひ拂ふ。黒谷の東岸和尚衣の袖をまくりあげ。韋駄天の如く飛來り。詞出家に棒を當てたらば五逆罪〳〵。サアおさん茂兵衛。此の東岸和尚が助けたと。地持ちたる衣をフシ打ちかけ〳〵肘を張つて立ち給ふ。詞役人頭腹を立て。罪科極つたる囚人を助けるとは。上を輕しめたる御坊の仕方かなはぬ〳〵。それ衣ひつぱけとどつと寄ればア、是々。出家侍悟りは同然。助くると云ふ義理は三世に亘る衣の德。愚僧が念願相叶ひ二人が命下さるれば。これ現世を助かる衣の德。もし又罪に沈んでも。愚僧が弟子になすからは未來を助かる衣の德。未來でも現世でも助かると云ふ文字二つはなし。サア助けたと呼ばゝる聲。諸人わつと感ずる聲。道順夫婦の悅の聲は。つきせず萬年暦昔暦新暦。當年未の初暦めでたく。開きはじめける。七行大字直之正本とあざむく類板世にありといへ共又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを亂せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾（竹本齋印）

博教

正本屋　山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門版